

第2回川越の指定文化財展

—未来に受け継ぐ、郷土の宝物—を終えて

はじめに

第2回川越の指定文化財展は、今年の7月16日から8月28日まで計36日間の会期で開催し、この間には合計8,232名と多くの皆様にご来館いただき、ご観覧いただくことができました。この場をお借りしまして改めてお礼を申し上げます。

本展は、第2回と冠が付いていますが、第1回が当館開館間もなくの平成2年(1990)10月開催のため、約26年の月日を経ての2回目開催というかたちになりました。当時(平成2年9月)の段階の指定文化財は、国指定文化財が13件、県指定文化財が34件、市指定文化財が114件の計161件となっており、展示では、その内の48件が絵画、彫刻、工芸品など文化財

種目別に分けて出品されました。開館してまだ時期が浅いこともあり、せんばとうしょうぐう仙波東照宮所蔵のたかえがく鷹絵額、みよしの三芳野神社所蔵のみよしのてんじんえんぎ三芳野天神縁起、きたいん喜多院所蔵で重要文化財のそうばんいつさいきょう宋版一切経、同じく重要文化財のいとまきたち糸巻太刀など、川越を代表する文化財が一堂に会する機会となりました。

それから約26年を経た今年はどうかといえば、4月現在には、国指定等文化財が16件増え29件、県指定文化財が6件増え40件、市指定文化財が83件増え197件、合計が105件増え総計266件もの文化財を有する規模になりました(指定解除で減った分も含みます)。この26年を平均してみると、毎年約4件の文化財が新たに指定されてきたこととなります。

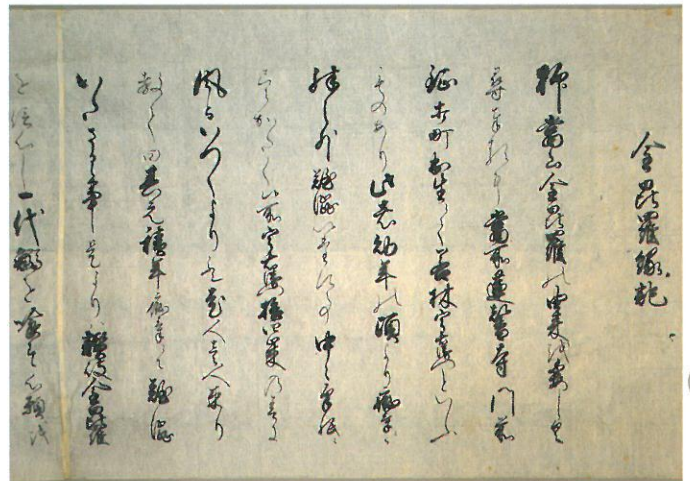
この間には、幾度かの文化財保護法の改定があり、

こうさいじ きたまち こんびらどう
広濟寺（喜多町）の金毘羅堂についての一考察

さて、今回の展示に際し、資料を確認していく作業の中で、興味深く思われたことから調査を行った事例について、ここでご紹介させていただきたいと思います。

それは、青鷹山慈眼院広濟寺(川越市喜多町、曹洞宗)境内にある金毘羅堂にまつわる内容のものです。この金毘羅堂は、江戸時代の地誌『新編武蔵風土記稿』にも金毘羅社としての記載があります。平成7年に建物と常什物87件が一括して市の文化財に指定され、その後基礎調査を含め平成9年度から14年度にかけて本格的な解体修理工事が実施されました。今回の展覧会では、数ある常什物の中から金毘羅縁起と本殿祭壇杉戸絵、十五童子像についてご協力を賜り展示する機会に恵まれました。杉戸絵と十五童子像については、前者は郷土の絵師、後者は江戸の名工の手によるものになります。

金毘羅堂を知る上では、由緒を記した金毘羅縁起が重要であり、記された文言により建立の状況を知ることができます(資料①)。それによれば、蓮馨寺門前鉦打町(今の連雀町)出身の若林宇右衛門が幼年期に



資料① 金毘羅縁起 巻頭部分

釈文
 金毘羅縁起

抑當山金毘羅の由来を委しく尋奉るに、當所蓮馨寺門前鉦打町出生にて若林宇右衛門といふものあり、此者幼年の頃より病氣二而殊之外難渋いたす事、中々筆紙二尽かたく候所、宇右衛門拾四歳の春に風与いつくより歎老人老人来り教て曰、其元積年病氣二て難渋いたさるゝ事、是よりハ讃岐金毘羅を信心し、一代鯛を喰す心願を込し歎、祈念怠りなく候ハ、願成就なさしめ給ふ事夢々疑ふへからずと言置歸りぬ、夫より宇右衛門教の如く鯛を断心願を掛し処日あらずして全快におよびぬ、誠に積年の病苦夢の覚たり心地二て夫より猶々信心怠りなく候、其後宇右衛門隣方出火ありし節、いつくより歎六尺有余の男黒装束二て来り、宇右衛門方の諸道具持はこひ候事、中々以人力のおよふ処二あらず、残らず老人二て道具を出仕舞、後宇右衛門くと呼、是成るは金毘羅の宮なり、大切にいたけと言捨、何れへ歎行去ぬ、是日頃念る御神の御救ひなさしめ給ふ御事と益々信心怠りなく、南門前若林源七と申合、講中を取立、蓮馨寺久保寛眼院先達二頼、何れの御寺へ勸請仕へくやと御鬮を取候処相定、養寿院・廣濟寺・長喜院、右三ヶ寺をしるし祈念いたして、御鬮取候処、廣濟寺二相定り候二付、志儀町榎本甚右衛門を相頼、御當寺大教和尚様江相願、尤為社地代金式両差上、安永九庚子年此所江御札勸請の御宮を建、安置奉り畢ぬ

安永九庚子年十月

先達 蓮馨寺門前久保 寛眼院
 願主 蓮馨寺南門前 若林源七
 願主 蓮馨寺門前鉦打町 若林宇右衛門

登録文化財制度が新設され、あさひ銀行川越支店(旧第八十五銀行本店本館、現埼玉りそな銀行川越支店)が県下初の登録有形文化財に指定されたり、一番街の蔵造りの町並みを中心とした地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、また川越氷川祭の山車行事が国の重要無形民俗文化財に指定されるなど、川越の文化財にかかる大きな出来事もありました。(特に、川越氷川祭の山車行事は、18府県33件の「山・鉦(ほこ)・屋台行事」の一つとして本年12月にはユネスコ(国際連合教育科学文化機関)無形文化遺産の一覧表に記載されることになりました。)

今回の展示では、これらの文化財については、実物資料の展示がなかなか難しいため、写真パネルや関連資料などにより展示を補うこととし、前回の展覧会以降に指定された文化財を中心に、前回展示しなかった資料や民俗文化財関連の資料、8件の初公開資料を地元の方々のご協力をいただき披露することができました。

会期中は、雨や曇りの日が多く天候にはあまり恵まれませんでしたが、ご来館いただきました多くの方々には、川越の文化財を間近にご覧いただき、アンケート結果からも川越の豊かな歴史や文化を改めて再認識していただけたものと思います。会場では、じっくり資料に見入る方もいらっしゃるれば、ご家族連れ、お仲間同士で親しげに会話されている光景もしばしば見られ、本展を見ての感想などを話の種として、身の回りの文化財に思いを寄せていただき、文化財を大切に守り、将来へつないでいくきっかけづくりの場になったとしましたら幸いです。

病弱で難渋していたところ、どこからか老人が一人現れて讃岐（今の香川県）の金毘羅を信心すれば心願が叶うと伝えていなくなり、教えを守ったところ全快した。また、加えて隣屋が火事になった際にも、金毘羅の化身が現れ家財を守ることができた。このことから講中を作り、金毘羅堂を立てるに当たり場所について養寿院、広濟寺、長喜院の3か所でくじを取った結果、安永9年（1780）、広濟寺境内に勧請することになったというものです。

その後金毘羅堂は広く人々の信仰を集め、明治、大正、昭和30年代に至るまで、9日が縁日となり賑わいました。特に戦前頃には芝居が立てられるほどであったと言われています。

これだけ多くの信仰を集めた金毘羅堂ですが、現在は年僅かにお堂が開かれるに留まり、参拝者もごくわずかです。常什物の中には、縁起や経典以外の古文書類はほとんどないため、信仰の在り様を窺い知る手段として、建造物に着目し、調査することにしました。

その建造物とは金毘羅堂の本殿・幣殿・拝殿の形に合わせて巡らされた計100本に及ぶ石製の玉垣です。大きな親柱は8本、小柱は92本あります。この玉垣



金毘羅堂 玉垣遠景



玉垣

も平成に入ってから金毘羅堂の解体修理工事と同時に修復がなされました。『広濟寺金毘羅堂修理工事報告書』によれば、当時の状況について、風化が著しく、深い亀裂が入ったものや、表面が剥落して文字が判読できないもの、表面に苔・地衣類の植生も見られ、多くは表面に塩分の析出が確認されたことなどが記載されています。この時の修理に際しては、そのまま表面を清掃、固化して保存する方針がとられました。現状ではさらに浸食が進んでいると思われるのですが、100本のうち剥落して全く読めないものが4本あり、一部分のみのものがあるものの、刻まれた銘を確認することができました（資料②参照）。

確認された銘から、この玉垣は、初め嘉永4年（1851）6月、志多町住の東屋吉兵衛が発願主となり、町内世話人2名を立て、広濟寺の住職二十六世古幢叟の代に築かれたことが分かりました。そして、それから49年経過した明治33年（1900）7月、金毘羅堂本堂の向拝造営とほぼ時期を合わせて修繕がなされ、この時には、信力社という結社が中心となっていたことも判明しました。「明治十五年ヨリ日誌簿」によれば、この修繕においては、玉垣の柱1本当たり1円50銭が寄附金として必要とされたとの記述が残っています。さらにこの年の12月には、境内に石鳥居も建てられており、金毘羅堂にかかる大掛かりな建造物の更新が集中的になされていたことを知ることができます。

では初めに、刻まれた銘から分かる寄進者について、居住地から考えてみたいと思います。当初の造営が嘉永4年、その後の修復が明治33年に行われ、それらが混在しているため確定的ではありませんが、概ねの傾向を把握することができます。出身地域が判明したもの（地元の方への聞き取りや他の史料等によるものを含む）を地域別に分類したのが資料③になります。件数で確認すると、やはり地元喜多町の出身が一番多くなっており、約25%を占めています。江戸時代には、川越の城下町は十ヶ町四門前に整備され、喜多町もその中に含まれていますが、この十ヶ町四門前全体で見ると、64%に及んでいることが分かります。その他には、松山道や六軒町など近隣の郷分町が約10%、その更に周辺部の近隣村も同様に約10%となっています。さらに遠方の川越藩領以外も約14%あります。

これらのことから、村の農民層の割合は小さく、町人や宿場の関係者が圧倒的に多いことが認められま

番号	種類	玉垣銘文			番号	種類	玉垣銘文			番号	種類	玉垣銘文			
		町村名等	肩書	屋号等			名前等	町村名等	肩書			屋号等	名前等	町村名等	肩書
1					33	角	堺町		熊蔵	69		高沢町		木村善助	
2					34		鷺町	水車	武蔵屋 忠造	70		當所		紺屋中	
					35		鷺町		武蔵屋 忠造	71	親、角	當所	世話人	笹屋	宇右衛門
					36		鷺町		武蔵屋 忠造	72		砂久保村			檀家中
3	角				37		鷺町		武蔵屋 忠造	73		志多町		東屋	鉄太郎
		明治三十三年七月修繕之	信力社		38		鷺町		武蔵屋 忠造	74		志多町		丁子屋	市太郎
					39		大塚新田		高野権右衛門	75		南町		近江屋	半兵衛
4					40		山口		新兵衛	76		下小坂村			増田柳造
5					41		松山道		錦屋 重之助	77		南町		山田屋	新助
6					42	親、角	松山道		錦屋 五郎兵衛	78		町内		近江屋	藤兵衛
7					43		御成橋		今西岩次郎	79		高沢町		小川屋	長三郎
8					44		南町		松本屋 長造	80	角	町内		甲州屋	傳五郎
9					45		蓮壽寺門前		茗荷屋 治右衛門	81					佐久間元長
10					46		鷺町		明石屋 文吉	82	親	松山道			矢沢四郎右衛門
11					47		鷺町			83	親	當所			富山二十六世徳興代建之
12					48		砂久保村		鈴木山口						紺屋職人中
13					49		鷺町		横田屋 専造	84		六軒町		今福屋	與八母
14	角				50		鷺町		廣瀬屋 五左衛門	85		近江屋		新七	新七
15					51		町内		坂本茂八	86		當所		八百屋	依兵衛
16					52		多賀町		鏑屋 重次郎	87		當所		笠幡村	大玉徳七
17					53		多賀町		岩屋 重太郎	88	角	小川宿			北屋 忠次郎
18	親				54		多賀町		岩屋 藤助	89					友野清兵衛
19	親				55		早内		酒本茂兵衛	90					
20					56		田嶋新田		藤 善五郎	91		上州伊勢崎川岸町		谷屋内	利吉
21	角				57		笠幡村		發知宅右衛門	92		志多町		上野屋	徳兵衛
22					58		六軒町		水田屋 山口(磯五郎か)	93		鷺町		名護屋	権兵衛
23					59	親、角			吉野重五郎	94				越後屋	源兵衛
24					60					95				綿屋	金造
25					61		町内		平岩屋 長次郎	96		町内		越後屋	平左衛門
26					62		南町		我野屋 幸造	97		志多町		越後屋	市五郎
27					63		足立郡田嶋村		紺屋 崋次郎	98		町内		酒本屋	山口
28					64		養寿院門前		森田屋 平次郎	99	角	南町		小松屋	堅助
29					65		鷺町		藤田屋 崋田金造	100					
30	親、角				66		南町		甲州屋 崋右衛門						
31					67		鉦打町		清水屋 梅五郎						
32					68	角	志多町		東屋 吉兵衛						

資料② 玉垣に刻まれた銘

す。地元町内の信仰者が多いのは十分予想されますが、それにも増して十ヶ町四門前の町域や近隣町村、他国領など、所在町外においても相当数に及んでいることが分かります。これは、金毘羅堂が地元住民の信仰のよりどころとなるだけでなく、かなり広範囲にその信仰圏を有していたことが推察されます。特筆すべきは、数はそれぞれ1本ずつですが、上野国伊勢崎や越後国居住者の寄進もあることです。隣国の伊勢崎はまだしも、遠く離れた越後の上越地方の者にも及んでいることは、どのようにこの信仰が伝播していったのかが興味深いところです。

続いては、寄進者名から特色を考察してみます(資料④参照)。ここでは、初めに大きく個人レベルでの個人名と複数の者が社会的つながりを持つ面からの社会団体名とに分類し、表を作成しました。前者の個人名は、①個人の姓名のみ及び屋号名のみ、姓名と屋号名の両方あるものと、②職名のついたもの、③二人以上の連名のものの3つに分け、後者の社会団体名は、①鳶や大工などの職名に関するもの、②①で二つ以上の連名のもの、③特定の目的を持った有志で組織されたものの3つにさらに分けました。

表を見ると、まず、寄進者が個人名で、特に一個人名の場合が圧倒的に多いことが分かります。個人の連名を加えると実に91%にも及びます。このことは、この金毘羅堂の信仰が個人的な信仰に基づいたものが主であることを物語っています。

続いて資料②と合わせてみると、社会的団体は割合としては非常に少ないものの、それでも幾つかあります。砂久保村の檀家中は、広済寺の檀家ということかは分かりませんが、何らかの形で寺請制度上の檀家組織が関わっていたことがあり、また足立郡田嶋村の個人での紺屋の寄進と合わせて、紺屋中、紺屋職人中の銘も見られることから、特殊技能を持った染色関係者の信仰も厚いことを窺うことができます。しばしば紺屋から著名な絵師が輩出されたことが知られますが、この紺屋連中の信仰の厚さは、金毘羅堂の常什物の豊かさ少なからぬ影響を与えているように思われます。

この他、嘉永元年「人別御改帳」、嘉永7年「十組連名帳」などの史料や地元の方への聞き取りにより記された個人名を分かる範囲で確認すると、その業種は、米穀、魚、青物、荒物、照降、紙、呉服、小間物、塩、酒造・醤油醸造関係、飲食関係、足袋、篩、鋳物師、宿泊業など多岐に亘っていることが分かりました。

一般に、金毘羅信仰は漁業や魚商、水運関係者など水に縁が深いことがよく言われていますが、当金毘羅堂の寄進者を見る限りでは、多種多彩で、あらゆる範囲に及ぶように見受けられます。もっともこの金毘羅堂がこの場所に置かれた縁由を鑑みれば、その時点で水に関するというよりは、病氣平癒の祈願成就という現世利益の結びつきがあった訳であり、それに城下町川越を中心とした様々な業種の町人が関わることで盛んに信仰されるようになっていった経過をある程度推

国名	領域①	領域②	町村名	件数①	件数②	割合
武蔵国	川越藩領内	十ヶ町	町内 喜多町	22	22	25.6%
			町内 嶋町	12		
			町内 南山	6		
			町内 志多町	5		
			町内 高沢町	4		
			町内 多賀町	2		
			町内 本町	1		
		町外 妙養寺門前	1			
		町外 蓮馨寺門前	1			
		町外 養寿院門前	1			
		郷分町	松山道	4		
			六軒町	2		
			石原町	1		
		近隣村	塚町	1		
	砂久保村		2			
	笠幡村		2			
	大塚新田		1			
	上寺山村		1			
	下小坂村		1			
	田嶋新田		1			
川越藩領外	遠隔町村	平塚村	1			
		小川宿	1	1	1.2%	
		松山元宿	8			
	上野国	越後国	御成橋	1		
			田嶋村	1		
			上州伊勢崎川岸町	1		
			越後国高田在山形村	1	2	2.4%

資料③ 地域別人数表

分類		本数	合計	%
個人名	一個人名	86	91	91
	連名	2		
	職名	3		
社団名	職名	1	4	4
	連名	1		
	有志名	2		
不明		5	5	5
計		100		100

資料④ 寄進者の分類

測することができます。

また、資料②において、松山元宿まつやまもとじゆくの小川権次郎は8本しぎまち、嶋町の武蔵屋忠造は5本と一人で複数の玉垣柱を奉納しているケースもあります。財力とともに信仰の力をこの金毘羅堂にそそいでいるという信仰の厚さという観点も窺うことができます。

おわりに

今回の調査では、玉垣の銘の確認とともに、明治33年の修理時に近い時期に作られた石鳥居の寄進者銘も確認しました。こちらは玉垣以上に風化が著しく、大部分が解読不能で、かろうじて名前の痕跡を残す程度でしたが、凡そ200名近くの記載があることが分



石鳥居（上）と風化した銘文（右）



かりました。

玉垣と石鳥居を合わせて300名に及ぶ寄進者の記録は、実際に信仰する人はそれよりはるかに多い数の人々からの信仰の上に成り立っていたことを想像させます。それだけ金毘羅堂への厚い信仰があったからこそ、87件にも及ぶ常什物を今に伝えることにつながったのだと思います。

また、こうした信仰面のみならず、場所として境内地を提供することになった広濟寺との関係性も考慮が必要です。江戸時代、当時の川越藩主松平大和守家の菩提寺である孝顕寺が火災で焼失した際に、やはり数あるお寺の中からこの広濟寺に仮寺が置かれ、また幕末期、水戸藩十九烈士埋葬の地（市指定史跡）であることや境内に明治期の震災供養塔があるなど、宗派を超えた懐の深い寺側の理解、協力があったことが考えられます。

背景のごく一部を垣間見たに過ぎず、まだ依然として金毘羅堂の全貌を解明するには程遠いですが、展示での出会いがあり、そして風化著しい玉垣と鳥居に刻まれた文言を記録する機会を端緒とし、今後とも他の文献史料などの調査を継続するなど、このお堂をめぐる信仰を追及していきたいと思ひます。

（学芸担当 峯岸太郎）

《付 記》

本文を作成するに当たり、広濟寺ご住職の上原正俊氏、人別帳等史料所蔵者の小杉国武氏、地元喜多町の高澤通庸氏、岡安和雄氏には多大なご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。

《主要参考文献》

『広濟寺金毘羅堂修理工事報告書』青鷹山廣濟寺 2003

『金毘羅信仰』守屋毅編 雄山閣 1987

「金毘羅信仰資料から見た瀬戸内文化」『民具マンスリー』第19巻12号 1987

『川越喜多町名主御用日記1』川越市立博物館 2016

講座・教室等ご案内

博物館の出前授業活動について

博物館の世界では「アウトリーチ」という言葉が叫ばれて久しいですが、博物館の資料を館外で利用するこの「アウトリーチ」プログラムについてどの館でも様々な創意工夫が行われていることと思います。当館では「箱・もの・人」の活用を目指して研究を行う一環として、「デリバリーミュージアム」という活動を行っています。最近実施した取り組みについて、資料の紹介も含めてお話いたします。

①「日本橋京橋の間鉄道馬車往復の図」を用いた授業

上記資料は昨年度、中央区立京橋図書館より資料をお借りして作成したものです。元資料は3枚の版画からなりますが、そのままでは教室での学習には使いにくいので大きく拡大しターポリンに印刷してあります。



授業はまず、この大型掛図を見ながら既習の「文明開化」について確認することからはじまります。そして既習事項の確認が終わったところから「この絵がどこなのか」という問いに発展していきます。教科書通りであれば日本橋だという確認をしてから進められるのですが、この資料を用いることで「川越かもしれない!」というミスリードを導くことを狙いました。黒い蔵造りの建物が立ち並ぶ様子を見て子ども達は余計に想像を膨らませていきます。「富士山が見えるから川越だよ」「描かれているお城は川越城だ」など狙いは見事にはまりました。ではこの時代の川越はどうだったのでしょうか。川越にも文明開化の波は押し寄せていたのでしょうか。

授業の中心では子ども達にグループで予想を立てさせ、その予想を実際の明治期の古写真を用いて検証して行きました。その結果、日本橋ほど急激ではないにせよ、川越にも文明開化の波が押し寄せていたことが確認できました。子ども達は教科書で習う知識を自分達の地域でも起きていた事実と知り、知識の定着と地域に対する愛着を高めることができたのです。

最後に、川越は明治26年の川越大火以降、蔵造りの店が立ち並ぶ町へと変わりますが、この新しい町が過去の日本橋の様子を色濃く映していることが一目で理解できるのが本資料であったといえるでしょう。そして元となった日本橋の町は全く別の外観に変わってしまったことから、残された現代の川越を大切にする意義についても考えることができ、とても実りの多い授業となりました。

②「学校日誌」を用いた授業

最近他市でも戦時中の学校日誌を用いた授業が取り上げられていましたが、本市でも博物館所蔵の資料を用いて戦争単元の学習を行う事例がございます。

本資料は昨年度市内の福原小学校から寄贈していただいた資料で、大正2年から昭和22年までの学校日誌がほぼ残されています。授業ではこの中からちょうど100年前に当たる大正5年の「尋常高等小学校」時代、戦時中の昭和20年の「国民学校」時代、そして戦争からの復興を進める昭和22年の「小学校」時代の3冊を取り上げ違いを読み取ります。

実際にこの3冊を見比べると、学校名称の違いだけでなく紙の厚さや製本の仕方といった外見だけでも様々なことがわかります。そして中身を見るとそれぞれの時代での出来事がわかり、大正では気温が現行の摂氏表示ではなく華氏表記だったり長閑な学校生活が窺えたりします。戦争最終

年の日誌からは空襲警報や軍事教練など生々しい記述が見つかります。戦後の日誌からは新しい教育を進める前向きな記述が多数見つかります。子ども達は実際にこのような出来事が日本で起きたことと、それが遠い町ではなく川越でも同



「学校日誌」

様に起こっていたことを目の当たりにしました。100年前の川越と天気や気温で一瞬にして繋がり、遠い活字の世界が身近な生の文字を通してリアルに想起することができるのは郷土資料の持つ大きな力でしょう。

③「むかしの消防」について話し合った授業

小学校の中学年では身の回りの生活の中の安全を守る消防組織について学習します。通常は身近な消火・防火の設備を探したり地域の消防署に見学に行ったりして消防の仕組みを学習していきます。本事例ではそれに加えて昔の消防について学び、現代の消防の違いに着目して現代の良さについて考える授業としました。

授業ではまず当時の消火方法について考え、学習前の自分の考えをもちました。そして「水鉄砲」と「^{とびくち}鳶口」の覆いを取り去り、これらの道具で消火したことを伝えます。現代と違い消防士という専門職はなかったこと、消火ではなく破壊消防であったこと、現

代のような多数の機関との連携や通信システムなどは無かったことなどを知っていきます。そして現代の消防について改めて考えます。常に専門の消防士さん達が交代しながら24時間いつでも出場できるように備える工夫や各機関との通信指令システム、高性能消防車などたくさんの優れた点がわかりました。

このように昔の消火方法について知ることを通して、現代の消防のシステムを振り返ってみると進歩している点や工夫されている点が浮き彫りになってきました。川越にとって火事は大きなキーワードです。地域の資料を使いながら、一人一人が町を守るという意識の向上にも一役買った授業だったのではないのでしょうか。

これら紹介させて頂いた活動は、博物館利用研究委員会の先生達と協力して作り上げた授業になります。この委員会で作り上げてきた実践事例をもとに、小中学校からの問い合わせに対して提案し、実際に授業を行っています。実際に今年度は小中学校で20件以上の授業を実施しています。これからも学校のニーズと郷土の資料との架け橋になれるよう、研究を続けてまいります。

(教育普及担当 寺内和広)

Information

平成28年度の博物館行事です(3月まで)

展覧会・講座・教室 etc

- ・・・一般向け事業 開催日・講座名
- ・・・子ども向け事業 内容・申込開始日

12月	<p>～11日(日) 第28回わたしたちの郷土川越展</p> <p>← 3日(土)～11日(日) 博物館文化祭</p> <p>●4日(日)・11日(日)・18日(日) 古文書講座 中級編</p> <p>○10日(土) 子ども体験教室 お正月飾りを作ろう</p>
1月	<p>← 14日(土)～ 第27回「むかしの勉強・むかしの遊び」展 ～2月26日</p> <p>○14日(土) 子ども体験教室 まゆ玉飾りを作ろう</p> <p>●28日(土) 大人体験教室 土偶作り教室</p>
2月	<p>1月14日(土)～ 第27回「むかしの勉強・むかしの遊び」展 ～26日</p> <p>○11日(土)・18日(土) 子ども体験教室 昔の道具を使ってみよう</p> <p>●12日(日)・19日(日)・26日(日) 歴史講座 川越の中世</p>
3月	<p>← 18日(土)～ 第44回企画展 蔵・倉・くらー蔵造りを知ろう ～5月14日</p> <p>○4日(土) 子ども体験教室 昔の織物に挑戦</p> <p>○11日(土) 子ども体験教室 和紙作りに挑戦</p> <p>○18日(土) 子ども体験教室 わら織工に挑戦</p> <p>●26日(日)・4月9日(日)・4月16日(日) 歴史講座 蔵造りを知ろう</p>

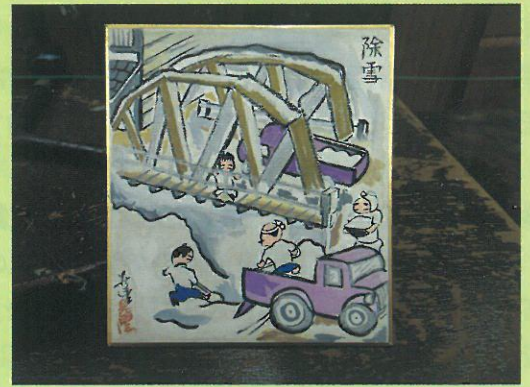
第27回「むかしの勉強・むかしの遊び」展

会期 平成29年1月14日(土)～2月26日(日)

毎年恒例の「むかしの勉強・むかしの遊び展」の季節がやってきました。この展示は、当館の収蔵資料から地域の人々の暮らしの移り変わりをたどる展示です。昭和30～40年代を中心に教室・居間・台所や駄菓子屋の店先を再現し、むかしの勉強を支えた教科書や文房具、遊びを彩ったブリキのおもちゃや熱中したベーゴマなどを展示します。また今回の展示では、菓子屋横丁を中心とした昭和初期の川越の様子も色紙絵の展示(右写真)を通してご覧いただければと思います。

この展示を通して、大人が子どもに当時の思い出を語れるような場となれば幸いです。

みなさまのご来館をお待ちしております。



利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城 本丸御殿	川越市 蔵造り 資料館	共通入館(観覧)券		
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	無料 公開中	300円	370円	600円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	無料 公開中	150円	180円	400円

※()内料金は、団体(20名以上、1名につき)の場合

◆交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より、

●東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス下車徒歩10分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車すぐ

●イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車すぐ

※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)

第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月29日～1月3日)

館内消毒(6月下旬)特別整理期間(12月下旬)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館)

◆ガイド ○博物館 平日(開館日)午前11時・午後2時 土・日・祝日 午前11時・午後1時・午後2時・午後3時
※予定を変更させていただく場合もありますので、ガイドを御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

○蔵造り資料館 ※耐震化事業のため休止中

○川越城本丸御殿 毎月第3日曜日 午前11時・午後2時 ※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。

◆機織り実演・体験(協力:博物館同好会)

○博物館 毎週火・水曜日 午後1時～3時 華の会(裂き織り)

毎週木・土・日曜日 午前10時～午後3時(12時～1時はお休み) 川越唐棧手織りの会

※予定を変更させていただく場合もありますので、御希望の方は博物館までお問い合わせください。



12月							1月							2月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3	(1)	(2)	(3)	4	5	6	7	5	(6)	7	8	9	10	11
4	(5)	6	7	8	9	10	8	9	(10)	11	12	13	14	12	(13)	14	15	16	17	18
11	(12)	13	14	15	16	17	15	(16)	17	18	19	20	21	19	(20)	21	22	23	(24)	25
18	(19)	20	21	22	23	24	22	(23)	24	25	26	(27)	28	26	(27)	28				
25	(26)	27	28	(29)	(30)	(31)	29	(30)	31											

3月						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
5	(6)	7	8	9	10	11
12	(13)	14	15	16	17	18
19	20	(21)	22	23	(24)	25
26	(27)	28	29	30	31	

()印は、3館休館(博物館、資料館、本丸御殿)

川越市蔵造り資料館は耐震化事業のため休館していましたが、工事着工まで一部を無料公開中です。公開時期につきましては、工事の都合で変更となる場合があります。

博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のQRコードから登録の手続きができます。毎月25日に最新の情報を配信します。

※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信等にかかる費用は利用者の負担となります。



発行日◆平成28年12月13日 発行◆川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1

TEL 049-222-5399

FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/